

事象の構造から見る二重デ格構文の発生

孟会君 (北京外国語大学日本学研究センター)

Studies on the Double-de-case Construction from the Perspective of Event Structure

Meng HuiJun (Beijing Center for Japanese Studies)

要旨

格の重複現象に制約がかかっていることは多くの研究者に指摘されてきたが、本稿ではBCCWJ中納言からの検索性例に基づき、二重デ格構文の発生可能性を事象の構造の面から考察する。意味格である「デ」はその事象成立での機能により、①「事態成立の基盤」という空間次元の「デ」、②「事態成立の媒介物」というモノ・コト次元の「デ」、③「事態成立のサマ」を規定する属性次元の「デ」という三種類に分けることができ、それらは事象の構造において異なる役割を果たしているため、お互いに共起できるが、同じ種類に属する意味役割同士は事象成立での機能も同じなので、事象の階層性や付け加えなどの場合を除いては基本的には共起できない。そのほか、〈様態〉デ格は副詞に近づく存在なので、その他のデ格との共起だけではなく、それ自身の二重共起でも容易に発生できる。

1. はじめに

日本語において、格の文中での並び方に関して、格の重複現象はよく問題にされている。格の重複現象というのは、一つの述語に対して同一の格形式が二つ以上現れるという現象のことであり、本稿では、格助詞の形態に従ってそれらを、「二重ガ格/ヲ格/ニ格/デ格」のように呼ぶことにする¹。

格重複現象の発生は格助詞そのものの性質と大きな関係があるので、本稿では意味格であるデ格に研究対象を絞り、その二重共起の可能性について考察することを通し、意味格の格重複の発生メカニズムの究明に貢献してみたい。具体的なやり方としては、格重複に関する従来の先行研究では、主に作例による議論が進められてきたが、個人の内省による判断の違いがあり、格重複の使用実態を把握するために、本稿では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を用い、そこから検出された実用例に基づき、二重デ格構文の発生可能性を考察してみたい。

2. 先行研究

従来、格の重複現象に関する研究は主に「ガ、ヲ、ニ」という三つの文法格に集中し、デ格の二重共起に関するものはほとんどが、格重複制約のそれへの適用を指摘することに止まっている。

たとえば、益岡(1987)は日本語での言語観察に基づき、「同じ意味を表す格は重複することができない」という原則を引き出し、それは例(1)のようにデ格にも適用できると指摘している。

- (1) a. * 大学で 教室で 音楽を聞く。
b. 部屋で ヘッドホーンで 音楽を聞く。 (益岡 1987 : 22)

¹ 場合によって格助詞が三重以上に共起するケースも見られるが、極めてまれであり、本稿ではとくに格の二重共起と区別しないことにする。

「意味役割」を格重複の発生の決定要因とするという点において、益岡(1987)は Fillmore(1971)の「単文異格の原則」²とほぼ同趣であるが、それですべての言語事象を説明できるかどうか疑うが残る。例(1)aにおける二つの〈場所〉デ格の隣接からは確かに抵抗感が感じられるが、それを(2)のようにすると、それほど許容できないわけでもないであろう。そのほか、例(3)のように、異なる意味役割同士なら必ず共起でき、同じ意味役割同士であったら必ずしも共起できないわけでもないようなので、この点についてはさらに検討する必要がある。

- (2) a. 大学では、いつもの教室で音楽を聞く。
 b. この大学で、芸術学部の教室では音楽を聞くことができる。
- (3) a. * 木切れでのみで仏像を彫った。 (杉本 2013 : 39)
 b. クリスマスイブに、全国で若者たちが路上でダンスパーティーを開いた。
 (矢澤 2007 : 213)

そのほか、二重デ格の発生可能性を検討することにより、デ格の用法を本質的に捉えてみようとする研究も見られる。たとえば、矢澤(2007)はデ格の「階層依存」という性質により、二重デ格現象を説明している。それによると、デ格は基本的には「動きの仲介・媒体」を表すが、その前接名詞や動詞、階層などのあり方によって〈場所〉〈道具〉〈原料〉〈原因〉などの意味に解釈される。このように、同一の意味役割であっても、出現位置が異なれば、その文中での機能も異なってくるので、一文中に共起できるのであるという。例(3)bはまさにそのように発生してきたものであろう。

矢澤(2007)での論述は同一の意味役割のデ格の共起に対してかなりの説明力を持っているが、異なる階層に出たデ格ならすべて共起でき、同じ階層に現れたものであれば意味役割が異なっても共起できないのか、はっきりしていないので、デ格の重複現象を体系的に把握したとは言えないであろう。そのほか、それは〈場所〉〈状態〉のデ格をも「動きの仲介・媒体」に帰結するが、それもやはり少々無理があるであろう。この点に関して、杉本(2013)は異なる捉え方をしている。それはデ格に二つの「同形異機能格」があると主張し、そのうち、〈原因〉〈手段〉〈材料〉の「デ」が例(4)のように一文中に共起できないのはそれらが「同一の格助詞」であるからという。

- (4) a. * 材料不足で代替素材で製品を作った。
 b. * 列車事故でバスで振り替え輸送を行った。 (杉本 2013 : 39)

確かに、そのような捉え方をすると、上述の三者の共起は Fillmore(1971)の「単文異格の原則」により経済的に排除できるが、そのようにすると、〈場所〉デ格の各用法、たとえば、〈範囲〉〈動作主〉なども同一の格助詞になるので、それらも一文中に共起できなくなるであろう。実際はどうなるのか、この点についてコーパスにより検証する必要がある。そのほか、例(4)bと同じような組み合わせになる例(5)は矢澤(2007)では認められているので、〈原因〉〈手段〉〈材料〉の「デ」の共起可能性についても検証する必要があるであろう。

- (5) 鉄道ストでバスで登校した。 (矢澤 2007 : 245)

² それによると、「一つの単文には同一の深層格を担う名詞句が共起できない」のである。

このように、二重デ格の発生を考察するには、デ格の用法をどのように捉えたいのかについて再検討する必要もあるし、個人の内省による判断のゆれをも避けなければならないので、本稿ではそれらを事象の構造での機能により捉えた上で、BCCWJ からの検索用例に基づき二重デ格構文の発生可能性について考察していきたい。

3. 事象の構造に基づくデ格の分類

3.1 「事象の構造」とは

本稿では、事象の構造の面から二重デ格構文の発生を検討するが、ここでいう「事象の構造」というのは「状態」、「活動」、「到達」、「達成」のようなアスペクチュアルな捉え方ではなく、言語により表出された客観世界の出来事の構造のことである。本稿では、デ格との関連で事象の構造を図1のように把握してみる。

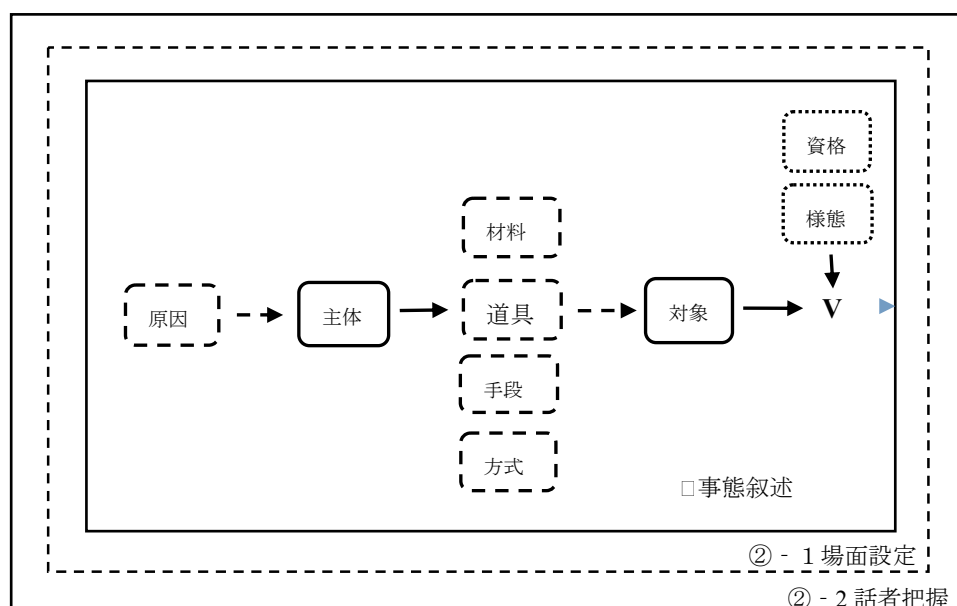


図1 デ格との関連での「事象の構造」への把握³

つまり、事象の表出は、①のような動力連鎖のような構造をしている「事象叙述」とその外側を包む②-1の「場面設定」と②-2の「話者把握」からなり、そのうち、前者の「事象叙述」は事態成立にとっての必須的な参与者(〈主体〉〈対象〉)や、補助的な媒介物(〈道具〉〈材料〉など)により成り立ち、後者の二つは客観性において差が見られるが、いずれも事態成立の基盤として働いている。このように、事象の構造というのは実は一種の階層構造である。

実は、こういう階層性はさらに事態成立の基盤の内部にも見られる。事態成立の基盤というのは、事態の成立を空間的に位置づけるものであり、そこにも異なるレベルのものが存在している。この点について、中右(1998)は「空間認識構造の普遍的モデル」を提出しているが、本稿ではそれに倣い、そこにはない〈状況〉⁴のデ格をモデルに位置づけるこ

³ 図1でのマークについて紹介してみる。②-1の「場面設定」の破線の枠はそれが②-2と本質的には変わらなく、ともに事態成立の基盤であるということを示す。そのほか、意味役割を囲む枠は格成分を表し、矢印は格成分と動詞との係り受け関係を表す。それらの実線と破線の区別はその文中での必須度を示す。〈様態/資格〉をその他のデ格成分と異なり、点線の枠にするのはその副詞性を表す。

⁴ 〈状況〉というのは特定の場所、特定の時間帯での物事のありさまなので、本稿ではそれを主観的な

とにより、事態成立の基盤の階層性をデ格との関連で図2のように把握してみたい。

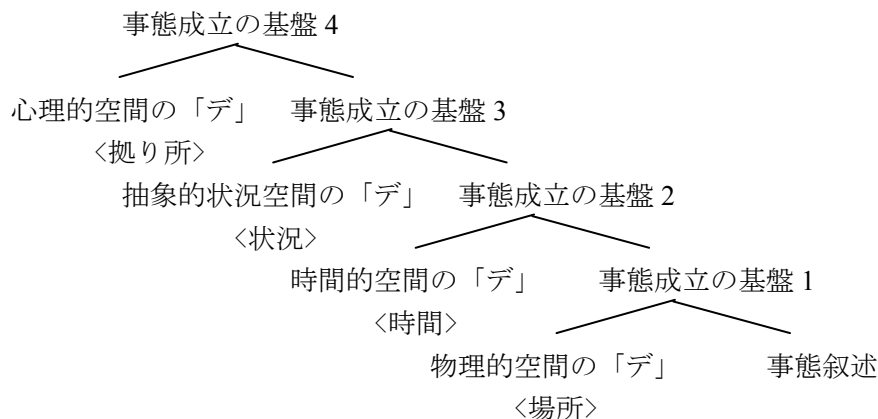


図2 デ格との関連での事態成立の基盤の階層性

3.2 事象成立での機能によるデ格の分類

本節では、デ格の各用法をその事態成立での機能により、以下のような三種類に分ける。

A. 事態成立の基盤のデ格

つまり、空間次元のデ格のことであり、このグループに属するのは、〈場所〉、〈時間〉、〈状況〉、〈投げ所⁵〉などのデ格があり、それらは文中において、それぞれ「空間」、「時間」、「抽象的な状況」、「話者の把握」など異なる面から事態の成立を位置づける。

そのほか、〈範囲〉〈期間〉〈限定〉などのデ格用法もあるが、それらは〈場所〉〈時間〉の用法からメトニミーリンクにより派生してきたものなので⁶、本稿ではそれらを後者の二次的な用法とする。それらは機能的には文の表す事態や状態の成立の「条件的な基盤」になるので、このグループにも属すべきであろう。

さらに、〈動作主〉のデ格は事態成立の必須的な参与者のようであるが、それは〈動作主〉ガ格のように、行為者となれるすべての名詞について〈動作主〉の意味役割を果たすわけではないし、例(6)のように、文中に〈動作主〉ガ格を加えると、それは〈場所〉に降格してしまうので⁷、そこからは「場所性」が強く感じられる。ゆえに、本稿ではそれを〈場所〉の二次的な用法とし、同じグループに位置づける。

- (6) a. 警察で調べたところうそだと分かった。 (動作主)
 b. 警察で調査員が調べたところうそだと分かった。 (場所)

B. 事態成立の媒介物のデ格

つまり、モノ・コト次元のデ格のことであり、このグループに属するのは、〈原因〉〈道具〉〈手段〉〈方式〉〈材料〉などのデ格があり、それらは文中においてともに事態成立の背景的な媒介物として働いているが、それを挟んでいる前接名詞の意味素性や述語動詞の文

「話者把握」のした、客観的な「場面設定」の上位に位置づける。

⁵ 文頭における「…の調査/統計/考えでは」などのような文の表す事態や状態の情報源を表すものなので、本稿では「投げ所」と言うが、国立国語研究所(1997)ではそれを「陳述」とする。いずれも事態に対する話者の把握であるという点においては共通している。

⁶ この点は森山(2002, 2004)を参照のこと。

⁷ こういう降格現象はすべてのデ格動作主に発生できるわけではないということは後で分析する。

法・意味的な特徴により特定の意味役割として実現する。

そのほか、〈目的〉、〈構成要素/内容物〉などのデ格用法も指摘されているが、それらはそれぞれ〈原因〉、〈材料〉と派生関係にあり、本稿ではそれらを後者の二次的な用法とし、同じグループに位置づける。

C. 事態成立のサマを規定するデ格

つまり、属性次元のデ格のことであり、主に〈様態〉デ格のことを指す。それは事態そのものの成立に直接に関係せず、ただ前接名詞の示される状態で、動作の進行に伴う動作主や対象の様態或いは、動作そのものの進行状態などを規定するだけなので、普通は副詞的な存在として扱われている。

そのほか、〈資格〉のデ格もあるが、それは実は主体や対象の身分的な〈様態〉に当たるので、本稿ではそれを〈様態〉の二次的な用法とし、同じグループに位置づける。

以上、デ格の各用法をその事態成立での機能により捉えてきた。上述の三種類は格助詞「で」の三つの中核的な用法なので、デ格は実は事態の成立を基盤的な位置づけ、補助的な媒介物、属性規定などの面から規定する背景格であると理解していいであろう。

4. コーパス言語学の立場から見る二重デ格構文の発生

本節では前節のデ格の分類に基づき、二重デ格構文の発生可能性について考察してみたい。まずは、検証例としての二重デ格構文の検索方法について紹介する。

4.1 用例の抽出

本稿では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中納言により二重デ格構文を検索した。具体的なやり方としては、キーを語彙素の「で」に、その前方共起語を品詞により「大分類一名詞」に指定する。このように一つのデ格名詞句を設定できるようになったが、その上でさらに前方共起語2と前方共起語3を同じような方法で設定する。このように検出された用例数は実は膨大になるので、筆者は二つのデ格名詞句の間の距離を5語以内に設定してみた。

上述の設定条件に合った用例を40,819件検出できたが、全て研究対象の二重デ格構文になるわけではない。そのうち、①二つの「で」が同じ文に存在しているのではない、②二つの「で」が同じ述語に掛かっているのではない、③検出された「で」が格助詞ではないなどのような二重デ格ではないものが多く、筆者はまた手作業で整理し、結局は二重デ格構文を2,371例検出した。本稿では、この2,371例の検出用例に対して定量的な分析を行うのではなく、それらを二重デ格構文の発生可能性への検証例として用いる。

4.2 二重デ格構文の発生の考察

4.2.1 事態成立の基盤のデ格と二重デ格の発生

先述した事象構造や事態成立の基盤の階層性に基いては、二重デ格構文の発生に関して、まずは以下のような仮定を立てる。つまり、

仮定1：事態成立の基盤のデ格はその他の機能のデ格とは包み包まれの関係にあるので、それらは自由に共起できる。

仮定2：事態成立の基盤のデ格用法の間にも階層性が存在しているので、それらはお互いに共起できる。

このようにできた二重デ格はいずれも階層性によるものなので、構造的には認められ、

許容度が高いようであるが、紙幅の関係で、ここでは、ただそのうちの〈場所〉デ格を中心に検証してみる⁸。

[1] 「場所+原因」

LBh5_00022 アメリカではオイルショックでディーゼル乗用車が売れ出した。
(沿道汚染 1993)

LB19_00079 岬の前の海では岩盤が泥で汚れたし、海藻が根腐れを起こして枯れてゆく。
(につぼん風景紀行 1997)

[2] 「場所+手段」

PB56_00089 東京湾では巻き網で漁獲される。 (相模湾のうまいもん 2005)

OC10_01347 人前では視線で注意を促す事があります。 (Yahoo!知恵袋 2005)

上記の共起パターンは許容度が高いようであるが、ほとんどは「ハ」により二つのデ格のうちより上位の〈場所〉を主題化したものであり、「ハ」による主題化は実はその前接要素を後続要素から統語的に分断化することでもあるので、こういう階層マーカークの「ハ」なしでも上述の共起パターンが共起できるのか、以下のような用例を見てみよう。例文の後ろの数字はアンケート調査をした上でその許容度を点数化したものである⁹。

(7)

PB43_00053 審理は公開の法廷で、口頭弁論でなされる。 (1.68)
(精説不良債権処理 2004)

PB39_00161 車はジョスリン通りとトレメイン通りの交差点で赤信号で停止した。 (1.48)
(秘密の顔を持つ女 2003)

OM61_00001 この映像のクマは、福井県名田庄村で、有害駆除目的で、おりで捕獲されました。 (1.23) (国会会議録 2002)

このように、事象の階層性によるデ格の共起であっても、その許容度はやはり表層的な形式に影響されているようである。上記のデータから見ると、①「ハ」による統語構造の階層化、②読点による二つのデ格名詞句の引き離し、③二つのデ格名詞句の隣接、④デ格名詞句の三つ以上の多重共起の順にその許容度が下がっていく。ゆえに、文の骨格作りに参与しない意味格のデ格であっても、その重複には表層的な制約がかかっていると結論づけていいのであろう。

次は、事態成立の基盤のデ格の各用法同士の共起例であるが、それらも予測のとおり、許容度が高いようである。

[3] 「抛り所+場所」

市民グループの調査では、生ごみ処理器を使っている家庭では、燃えるごみの排出量が

⁸ 検証例として使われるのは、基本的には中納言より抽出したものであるが、当該パターンが中納言で検出できなかった場合は、補足として1998-2000三年間の朝日新聞(電子版)より検出することにする。

⁹ 実例であっても語用などの原因で生じた場合もあり、それらは文法的に必ずしも正しいというわけではないので、本稿では補足として、周辺的な用例に対し許容度調査を行った。例文の後ろのデータはアンケート調査の結果を点数化して記すものである。調査は2014年7月11日に筑波大学で実施し、対象者は学生、総数44人である。算定法としては天野(2008)を参考に、自然・少し不自然・全く不自然の三段階の判定結果をそれぞれ2・1・0点に換算し平均値を示すものである。

75%も少なかった。

(1999.03.14 朝日新聞)

[4] 「状況+場所」

OM11_00011 ロッキード問題をめぐる大変な疑獄、汚職がはやっている中で、福島県で知事が逮捕された。

(国会会議録 1976)

[5] 「時間+場所」

関係省庁の話し合いの過程では、通産省と外務省との間で、こんなやりとりが繰り返された。

(1999.08.02 朝日新聞)

以上の検証は実例の提示に止まっているが、続いては、〈動作主〉デ格とその他のデ格との共起可能性についても検討してみたい。次のような用例を見てみよう。

[6] 「場所+動作主」

新団体では10人ほどの報行部で運営するというが。 (1.86) (2000.01.19 朝日新聞)

[6]の例において、二つのデ格がともに〈場所〉と考えられるかもしれないが、「運営する」という述語動詞の情報上の完結性のために、〈動作主〉が必須項として要求されているので、二つのデ格のうちの一つは〈動作主〉として働かなければならなくなる。このように、[6]の二重デ格は実は「場所+動作主」の組み合わせになっている。

先述したように、〈動作主〉デ格からは「場所性」が感じられるが、そこには実は度合いの差が存在している。こういう場所性の強さにより〈動作主〉デ格は二つの種類に分けられ、それらは二重デ格の発生において異なる振る舞いを見せている。

- (8) a. 警察で調べたところうそだと分かった。
 b. 警察で調査員が調べたところうそだと分かった。
 c. 警察では捜査部で調べたところうそだと分かった。
 d. 中国側では、警察で調べたところうそだと分かった。

例(8)a)においてデ格の前接名詞である「警察」は組織・ヒト未分化の機関名詞であり、それは両義性を持っているので、文脈によっては〈動作主〉とも、〈場所〉とも解釈できる。先述のように、そこに〈動作主〉ガ格を加えると、「警察で」は〈動作主〉から〈場所〉に降格するが、c)のように、新たに加えられた〈動作主〉がたまたま「捜査部で」のようなデ格成分であったら、「場所+動作主」という二重デ格が生じる。d)は「警察」の前により広い範囲の〈場所〉を加えたもので、降格が発生しないが、「場所+動作主」の二重デ格になるという点においてはc)とは変わらない。

- (9) a. 私と佐藤でその問題に取り組んだ。
 b. わが社では、私と佐藤でその問題に取り組んだ。 (1.95)

一方、例(9)において、デ格の前接名詞が複数の個体であり、それは人間の集合を組織扱っているため、場所性が多少感じられるが、究極的に〈場所〉ではないので、そこに〈動作主〉ガ格を加えても、もとの〈動作主〉が〈場所〉に降格できない。ゆえに、ここに二重デ格が発生できるのはb)のような〈場所〉を新たに加える場合に限られている。

続いては、〈動作主〉デ格と〈手段〉〈様態〉のデ格との共起についても論じてみる。

[7] 「動作主+様態/手段」

同センターによると、各会場で試験開始と同時に板書で訂正したという。

(2000.01.07 朝日新聞)

OY07_02613 ギブスも取れないようだし、生活に不便があるでしょう。娘と私で交代で泊りに行くかなあ…

(1.84) (Yahoo!ブログ 2008)

以下の作例もそれらの共起を証拠付けられるであろう。

- (10) a. 警察で調べたところうそだと分かった。
 b. 警察でウソ発見機で調べたところうそだと分かった。 (動作主+道具)
 c. 警察でDNA鑑定で調べたところうそだと分かった。 (動作主+方式)
 d. 警察で身分秘匿で調べたところうそだと分かった。 (動作主+様態)

以上は〈場所〉とその二次的な用法である〈動作主〉デ格を中心に、事態成立の基盤のデ格の二重デ格の発生可能性について考察してきた。そこに生じた二重デ格はほとんど階層性によるものなので、許容度が比較的高い。

4.2.2 事態成立の媒介物のデ格と二重デ格構文の発生

本節では、事態成立の媒介物というモノ・コト次元のデ格の共起可能性について検討してみたい。考察に入る前に、まずは二次的な用法とされている〈目的〉〈構成要素/内容物〉のデ格とその元用法になる〈原因〉〈材料〉のデ格との共起可能性について説明してみたい。

- (11) この飛行機は木と薄い鉄板できている。

例(11)において、「木と薄い鉄板で」は〈材料〉とも〈構成要素/内容物〉とも解釈できるように、この三者は本質的には同一の用法である。それらの区別という、かかっている述語動詞の意味特徴にあるようである。つまり、

- ① 材料名詞+デ+作成動詞 ○ 大麦で酒をつくる (材料)
 ② 構成要素+デ+構成動詞 ○ うそと虚飾で成り立っている世界 (構成要素)
 ③ 内容物+デ+充満動詞 ○ 店内はその八割ほどが客で埋まっていた。(内容物)

このように、三者はそれぞれ特定の述語動詞にしか係らないので、それらの一文中での共起はまず有り得ないであろう。〈原因〉と〈目的〉もこういう関係にあり、それらの一文中での共起も許されない。このように、本節では主に〈原因〉〈道具〉〈手段〉〈方式〉〈材料〉の間の共起可能性について考察することにする。

事象構造から見ると、「何のために誰が何を使ってどういう方法で何をやった」のように、〈原因〉〈道具〉〈方式〉などの意味役割は一文中に共起できないわけでもないようであるが、それらを同時にデ格で表していいのか、さらに検討する必要がある。

[8] 「原因+手段」

PB42_00026 旅人に生水は禁物だということでペプシコーラで代用した。 (1.75)

(沙漠の旅 2004)

LBo4_00044 その五日前に、突然の昏睡で救急車で入院してきた。(臨床に吹く風 2000)

例(12)は先述した異なった文法性判断が下されていたもので、ここではそれらを許容度の点数付けで挙げることにする。

- (12) a. *列車事故でバスで振り替え輸送を行った。 (1.16) (杉本 2013 : 39)¹⁰
 b. 鉄道ストでバスで登校した。 (0.93) (矢澤 2007 : 245)

このように、そのいずれの許容度も高くないようで、〈原因〉と〈手段〉の共起はやはり許されないのであろう。ところが、[8]のPB42_00026は高い許容度を示しているのはなぜなのだろうか、それは「…ことで…」という形式とは関係があると考えられる。杉本(2013)は〈原因〉の「ことで」は文法的に格助詞よりは接続助詞に近い性質を持っていると指摘しており、本稿で観察された上述の現象もまさにそのためであろう。

[9] 「道具+方式」 / 「材料+道具」

- LBo5_00015 洋服をドラム式洗濯機でお湯と洗剤で洗い、乾燥機で素早く乾燥させる。
 (1.45) (はて・なぜ・どうしてクイズ石けんと合成洗剤 2000)
 OC08_01823 ブリタで作った浄水で、別の容器で麦茶を作るのが良いのではと思います。
 (1.39) (Yahoo!知恵袋 2005)
 ? 息子は色鉛筆で遠近法で絵を描いています。 (1) (作例)

このように、事態成立の媒介物のデ格の一文中での共起は基本的には許されないようであるが、コーパスからこのような用例を少なからず検出できたのはなぜなのだろうか。実は、そこに語用的な要素が存在しているのであろう。このタイプの検出例から付け加えの読みが強く感じられ、話し手はまさに新しい情報の付け加えの意図で、二つのデ格の間に心理的・音声的なスペースを作り、上記のような構文を出したのでであろう。この点は実はこれらの意味役割の機能上の同一性の証拠にもなる。

4.2.3 事態成立のサマを規定するデ格と二重デ格構文の発生

先行研究において、こういう属性次元のデ格が〈様態〉デ句とされることがあるように、それは統語的には格の振る舞いをしているが¹¹、機能的にはただ事態がどのようなさまで成立したかということに対して補足的に修飾するだけなので、そこからは副詞性が強く感じられる。まさにこういう副詞性のため、〈様態〉デ格はその他のデ格成分とは自由に共起できるようである。

[10] 「場所+様態/資格」

- LBI1_00011 法律案は十三日の衆議院本会議で賛成多数で可決され、参議院に送付されました。
 (改正宗教法人法 1997)
 PB53_00409 赤軍軽井沢山荘事件の被告達は、国民の目の前で殺人の現行犯で逮捕された。
 (1.66) (台湾を独立させよう 2005)

[11] 「手段+様態」

- LBI9_00153 大名たちが、火事装束で早馬で門を走り抜けていった。

¹⁰ 文頭につけた文法性判断のマークは著者によるものである。

¹¹ 李(2008)は語順の転換、とりたて詞「だけ」の挿入などのテストにより、この「状態記述2次述部」の「で」は格助詞であることを論述した。本稿でもこの点に賛同し、それを副詞性の強い格助詞とする。

(夜明け前の女たち 1997)

LBm7_00031 前景はやや荒っぽいタッチで強めの墨色で描いている。(1.68)

(墨絵独習書 1998)

[12]「様態+様態」

LBk9_00009 中に白装束で重力のない足どりでやってくる宮廷のバラモン階級の僧侶ペ
ダンダたちと、暖かいまなざしの老人である村… (旅のはざま 1996)OB5X_00230 彼女は困り切った表情で、小声で尋ねた。(新・人間革命 1998)

このように、ほとんどは二つのデ格名詞句の隣接になるが、許容度はそれほど低くない。これもこういう属性次元のデ格の副詞性とは関係があるのであろう。つまり、<様態>デ格が機能的には副詞的な存在なので、それと他の機能のデ格と隣接しても格の衝突がそれほど強く感じられない。そのほか、[12]のように、修飾成分の並列や付け加えになるが、<様態>自身の二重共起も容易に発生できるようである。

5. 終わりに

以上はコーパスからの検索用例に基づき、二重デ格構文の発生可能性を事象の構造の面から考察してきた。以下のようにまとめられる。

[1] 事象構造において異なる機能を果たすデ格用法はお互いに共起できる。そのうち、特に階層性により支えられているものは、許容度が比較的高い。

[2] 事象構造において同じ機能を果たす意味役割同士は一文中に共起できるようであるが、事象の階層性や付け加えなどの語用の場合を除いては、同時にデ格により表せない。

[3] 属性次元のデ格成分は副詞性の強いものなので、それがその他のデ格との共起は言うまでもなく、それ自身の二重共起も容易に発生できる。

[4] 意味格のデ格であっても、その重複に表層的な制約がかかっている。

なお、紙幅の関係で、本発表では同じ意味役割の共起可能性については論じられなかったため、この点をこれからの課題として残したい。

参考文献

- 天野みどり(2008)「拡張他動詞文—『何を文句を言ってるの』—」『日本語文法』8巻1号、pp.3-19
- 国立国語研究所(1997)『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 杉本 武(2013)「原因の『〜で』と『〜ことで』について」『文藝言語研究 言語篇』63巻、pp.37-52、筑波大学文藝・言語学系
- 田中春美(1987)『格文法の原理—言語の意味と構造』三省堂
- 中右 実(1998)『構文と事象構造』研究社出版
- 日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版
- 益岡隆志(1987)『ケーススタディ日本語文法』桜楓社
- 森山 新(2002)「知的観点から見たデ格の意味構造」『日本語教育 巻115』、pp.1-10
- 森山 新(2004)「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会 論文集』4巻、pp.66-76
- 李 昇祐(2008)「状態記述2次述部と『で』」『日本語と日本文学』47号、pp.70-80
- 矢澤真人(2007)『日本語状態修飾関係の研究』筑波大学博士学位論文